

えくてびあん

臨時号

立川と語ろう 立川に生きよう
EXTRA ISSUE 2003
EKUTEBIAN Vol.21 No.224



表紙の人 / 信田美帆 (砂川町) 撮影 / 細江英公

砂川深層

後記

昨年2月より『砂川深層』と題して始まった連載が前回をもって最終話を迎えた。案内人を務めてくれたのはご存知、生まれも育ちも砂川、生粋の砂川っ子の豊泉喜一さんだ。12回という限られた枠の中で、砂川の歴史を識り尽くすことは叶わなかったが、砂川地区に纏わる興味深い話を数多お訊きすることが出来た。郷土史の研究をライフワークとする豊泉さん。いずれまた、喜一節に触れ得る機会もあろう。

写真・五来孝平



連載を終えるにあたって……

江戸に徳川幕府が開設されたのが今から四百年前のことである。丁度その頃、武蔵野の荒野を開拓し、砂川の村づくりが始まった。砂川が今日の姿となったのは勿論、開拓者たちの汗と努力によるものだが、その先人たちの足跡も時代の変遷とともに人々の記憶から遠ざかりつつある。

そうした人々に敬意を払い、一年間、十二回に亘る連載を続けてきたわけだが、果たしてどれ程、深層に触れることが出来たかは内心忸怩たるものがある。今回の連載を通じ、もっと砂川に興味を持ち、砂川という土地を好きになる人が増えてくれれば幸いである。最後に取材にご協力くださった方々と、一年間、拙文をお読みくださった皆さまに感謝申し上げたい。



豊泉 喜一



惜別Ⅱ 今月も「創刊号」の心算で

本誌編集人 立井啓介 × 本誌記者 小林 康史

啓介 創刊の頃は「えくてびあん」って名前が街に定着するかどうか、ずいぶん心配したんだよ。

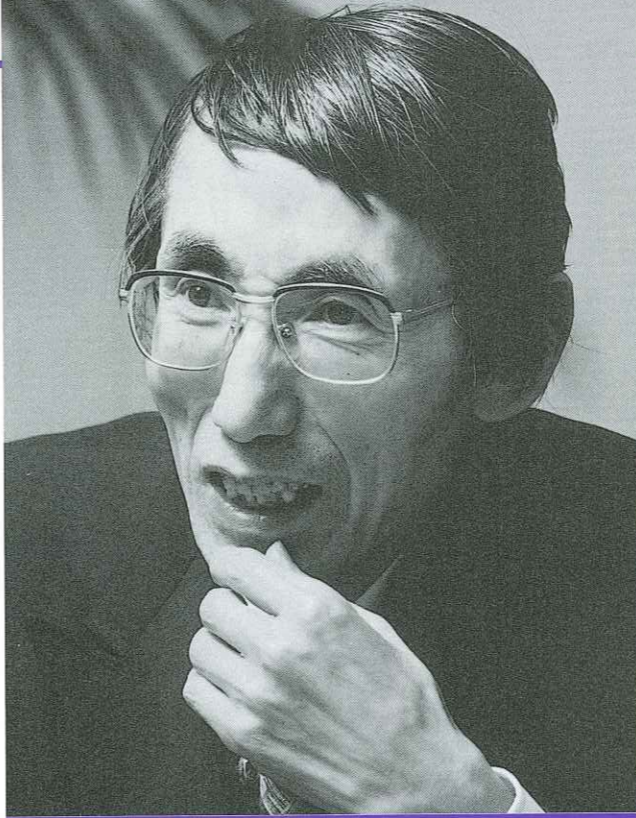
小林 まあ「ちよっと聴いて」って意味のフランス語ですけれど。タウン誌の名前としてはユニーク。と云うか、はっきり云って変ですよ(笑)。でも最近ではこちらが名乗ると「あ、あの」って反応が返ってくる。有り難いことです。

啓介 創刊の時にね、まず最初に、立川印刷所の鈴木蘭郎さん(富士見町)に相談に行っただよ。こういうの作りたいんだって。

小林 本誌の対談でも鈴木さんが語ってくださってます(平成十三年三月号)。「やめなさい、続かないよ」って云われたという。

啓介 鈴木さんは職業柄、そういう例をたくさん知ってらっしゃるから。

小林 いわゆる、三号雑誌ってやつです



ランナーズ・ハイという言葉がある。長距離走者がある一定の速度で走り続けた時に意識の中で起る現象のこと。得も言われぬ爽快感と多幸感、このまま永遠に走り続けられるんじゃないか、とまで思う程の快感が脳の中を駆け巡るという。

啓介 で、奥さんが野口さんのお勤め先に電話してくれて。「変な人たちが来てますけど」って(笑)。で、なんとか撮影させてもらうことができた。初めの頃は、本当にそんなことばかりだったんだよ。いきなり怒鳴られたこともあるしね。信用を作るといふことの重大さ、号を重ねていくことの大切さを痛感したね。

啓介 それは、後になってから気づいたんだ。最初ももっと広げれば良いなと思ってた。新聞の多摩版みたいに、エリアが広いほど企画も充実させることが出来るんじゃないかって。でも、次第にそうじゃないと判ってきた。だだっ広いテーブルにおかずを並べるよりも、小さいお皿に滋味豊かな料理を盛りつける喜びの方が勝ってきたんだね。「この皿で勝負するんだ!」という。

小林 でも、いざ始めてみたら、釣堀どころか…。

啓介 溪流だった(笑)。こちらがちやんとした「眼」を持っていけば、どんな出会えるんだよ。無尽蔵と云ってもいいくらい。

小林 眼、要するに切り口ですか。

啓介 うん。それと同時に、まず作って自分たちが「たかがタウン誌じゃないか」と卑下することのないよう腐心したね。だから、まず編集長自身が全国版の仕事をしなけりゃと思つて。

小林 個人的には、自分が入社した時期がちょうど十周年記念号「われら立川人」の編集作業真っ只中で、すごく印象に残

つてますね。連日、朝方まで原稿用紙と格闘して。

啓介 よくやってたよ。仕事につぶされちゃうのが編集地獄だとしたら、あの時はまさしく「編集極楽」だったな(笑)。編集者それぞれの情熱を越えて、媒体の持つ力のようなものが一気に噴出した感があった。記念パーティーも多くの立川人がかけつけてくれて、とても盛り上がりがあったしね。



小林 なにしてる二十年ですから、思い出は尽きないですね。ここで一気に振り返るといっても難しいんですけども。

啓介 昔の話は本当はしたくないんだな。どうしても「昔は良かった」ってなっちゃうだろ(笑)。まあ、それはいつの時代でも、古い人間は新しい人間に対して云う言葉なんだけれどね。

小林 じゃあ昔話はこれくらいにして。本号をもって立井さんは編集人を引退さ

れますけれども、これからのえくてびあんについて何かありますか。一応うかがっておきます(笑)。

啓介 何か遺言みたいな(笑)。そうですね、やっぱり継続させることは難しいんだね。

小林 創刊当時の取材の様子は、どんな感じだったんですか。

啓介 なにしてる実績がないんだから、まず取材の相手に信用してもらおうのが一苦労だったね。創刊号は、まず野口慶次さん(栄町)が所有する蝶のコレクションを

表紙に使わせてもらおうってことになつて、カメラマンと一緒に自宅に伺つたんだよ。でも、奥さんが家にあけてくれないんだ(笑)。

小林 連絡してなかったんですか。

啓介 いや、野口さんご本人の許可は頂いてたんだけど、その日は平日でお勤めに出られてた。でも、奥さんの耳には入ってなかったんだな。

つたんだな(笑)。で、街の商店にえくてびあんで置いて頂いて、買物に来たお客さんに自由に持ち帰ってもらおうという方法を考えた。あの時は僕も含めて二、三人のスタッフで、脚を棒にしたねえ。一軒一軒、お店を訪ね歩いて「えくてびあんです」って頭をさげて。

かみゆい処 わ	柴崎町2-4-8 522-8202
芹沢ガラス店	柴崎町2-4-8 522-3065
お茶・海苔 小室園	柴崎町2-4-8 522-2894
ジョイフルプラザ アネックス	柴崎町2-4-14-1F 521-1228
ファッションハウス ホマレヤ	柴崎町2-4-15-1F 525-2788
焼きたてパン オーロール 立川店	柴崎町2-4-15 527-9473
純中国料理 北京大飯店	柴崎町2-4-19 522-6393
和食の店 ななや	柴崎町2-4-22 525-6980
田中星美堂薬局	柴崎町2-5-3 522-3913
特むし銘茶・海苔 菊川園	柴崎町2-5-6 526-2035
Cafe COLORADO	柴崎町2-5-8 526-2285
西欧厨房 グランディール	柴崎町2-5-8-2F 522-0729
マエダ文具店	柴崎町2-6-2 525-6584
Natural Life Shop ピュアグリーン	柴崎町2-6-2 521-2690
スタジオ269	柴崎町2-8-10 527-0269
写真の エース	柴崎町2-9-2 523-0851
Fashion You Me	柴崎町2-9-28 523-1640
石原薬局	柴崎町2-10-3 523-4067
豆腐 やざわ屋本店	柴崎町2-10-14 522-4338
サイクルハウス 輪輪館	柴崎町2-12-17 522-8100

えくてびあんの輪

人があつて、街があつて。
あなたがあつて、立川があつて。
そこにちょっとだけ、えくてびあん!
リストのお店にはいつでも、えくてびあん!

ビジネスHOTEL クボタ	柴崎町2-12-23 522-1122
いなげや 立川南口店	柴崎町2-12-24 526-2947
いなりすし・のり巻きすし 松月	柴崎町2-17-20 523-4758
カフェテリア 木の葉	柴崎町2-17-23 522-9251
カレーショップ 砂時計	柴崎町2-18-10 525-2414
グリーンデンタルクリニック	柴崎町2-21-12 527-1137
ビューティーサロン ウィスタリア	柴崎町2-21-15 527-1116
ロッテリア 立川南口店	柴崎町3-1-3 522-3928
とんかつ専門 かつ亀	柴崎町3-5-2 525-7647
サンカメラ	柴崎町3-7-22 522-3336
パッケージプラザ カサイ	柴崎町3-8-7 522-8601
りそな銀行 立川支店	柴崎町3-10-1 522-4161
手打ちぎょうざ工房	柴崎町3-11-25 522-4770
松山堂薬局	柴崎町3-13-25 522-2550
こむろ酒店	柴崎町3-14-3 522-2613
矢沢歯科眼科	柴崎町3-16-2 525-6600
手作りケーキの店 プティパニエ	富士見町1-22-30 529-8364
榎本調剤薬局	富士見町1-31-18 526-2322
立川市歴史民俗資料館	富士見町3-12-34 525-0860
酒 ESPOA おぎの	富士見町4-17-7 522-4500

創刊より月を重ねて20年

月刊えてびあんは この夏、成人式を迎えます。

1984年8月、立川の地域情報誌として産声を上げた『月刊えてびあん』。
ヨチヨチ歩きの小誌は立川の多くの人たちに支えられ、ついにこの夏、満二十歳を迎えます。
これまで、実に様々な滋味溢れる立川人が誌面を飾ってくださいました。
お一人お一人を紹介できた喜びを胸に、更なる一步を踏み出します。
今回は8月号から装いも新たにスタート。変わらずご愛読ください。

本誌をもって通巻224号。とても全部は載せられないため、8月号の表紙のみを掲載。



1999年8月号より、国際的写真家・細江英公氏が立川人を活写。表紙の人として、えてびあんの顔を飾る。

無我夢中で走り続けているうちに、いつの間にか20年の歳月が流れました。こうして並べてみると、よくぞここまで来たなどの想いが湧き、取材の日々が昨日のことように思い出されます。



(砂川町)

1972年5月18日生まれ。4歳で「体操競技」に出会う。16歳で、体操日本代表選手としてソウルオリンピックの舞台に立つ。体操選手引退後、セリーグペナントレース巨人軍のファイヤーガールとして活躍。1999年、つくプロデュースによる芸能人新ユニット「太陽とシスコムーン」のメンバーとして衝撃的デビューを飾る。ユニット解散後は、スポーツキャスターを中心にドラマ、バラエティーなど多方面にて活躍中。(於・昭和記念公園/撮影・細江英公)

工房から

創刊以来19年余、月刊えくてびあんの舵取りをしてきた立井啓介が満65歳となったのを機に3月末をもって当工房を辞しました。本来3月に出るべきお別れ号が大幅に遅れ臨時号となったことをまずお詫びいたします◆おかげさまで今夏で創刊以来満20年。8月号から内容を一新して再スタートを切るべく準備を進めております。20歳、成人の自覚を深め、立川のタウン誌として今まで以上に鮮度ある誌面を提供していきたいと存じます。それまでの期間の休刊をお詫びするとともに、引き続きご愛読をお願い申し上げます◆このような事情で、昨年9月より連載の「人形気分」は今回をもって最終回とさせていただきます。本誌の節目と、さとうその子さんとは不思議にご縁が深く、創刊10周年記念「われら立川人」の表紙を飾ってくれたのも、その子作品でした。改めてご紹介する機会を作りたいと願っています◆「深川深層」を連載して下さった豊泉喜一さんから読者の皆さまへの挨拶文を掲載させていただきました。生まれ育った郷土をこよなく愛するお気持ちがあひひと伝わってきます◆2003年2月号「表紙の人」の文中、十善寺とあるのは十善院の誤りでした。小林秀英氏をはじめ各位に深くお詫び申し上げます。

【第三次えくてびあ人同】編集 大久保清志/小林康史/杉山清純/芳賀敏博/山田五郎デザイン 池田隆男/AMNET DF写真 五来孝平/宮保大輔

えくてびあん 臨時号 第21巻 通巻224号 平成15年6月1日発行 発行 えくてびあん編集工房 〒190-0012 東京都立川市曙町2-17-5 杉田ビル3F TEL. 042-528-0082 FAX. 042-528-0065 編集人 立井啓介 発行人 瀬尾勤三 印刷 (株)大廣社

無断転載を禁じます。

ひとまづ、さよなら えくてびあん

立井啓介

丸々一九年前に創刊いたしました『月刊えくてびあん』に、左様ならを云はなければならぬ日を迎へなければなりません。立川人の皆さま、永い間のご指導、ご交誼、誠に有難うございました。伏して御礼申し上げます。

想へば、この歳月はわたくしにとりまして誠に「青春期」でございました。一度目の青春期は世間で云はれるそれで、十代から二十代の前半くらゐ、第二期はわたくしにとって巴里での二年半だったやうに思へます。次に訪れたのが立川生まれの『えくてびあん』で、その中でも特に創刊当時の胸のときめきは格別でございました。

われながら惜しむらくは、体力に恵まれず、病氣勝ちであつたことです。白血球が急激に減少を医師から知らされ、これを筆頭にリウマチ、肝硬変など続々と患ひ、入院も八年間に六回を数へるやうになつてしまひました。最初に入院したのが八年前だと知れるのは、当日の朝、阪神淡路大震災の報道が流れたのを記憶してゐるからで

ざゐります。身体虚弱、意志薄弱のわたくしを支へてくださりました多くの立川人の皆さま、永い間、お世話になりました。ひとは縁の生きものでござゐます。再びお逢い出来る日もあらうかと存じます。末永くご交誼のほど、お願い申し上げます。わたくしの拙い末文とさせていただきます。有難うございました。

おしづかに (本誌編集人/たていけいすけ)



うなぎ しら澤

●曙町1-9-21 ●524-5061 ●営業時間 11:00~21:00 ●火曜日定休 ●Pあり(1台) ●テーブル16席、カウンター5席 ●Pあり(1台)

この値段でこの味は圧巻 驚きのコストパフォーマンス

うなぎと聞けば、まず高いものだという先入観がつかってくる。家族揃ってうなぎ屋に行けば、1万円の会計は下らないだろう。だが、ここ立川に家族3人で寄っても5千円でお釣りが来る店がある。2001年、曙町にオープンした「しら澤」がそれだ。店主の白澤和男さんは、26歳の頃よりこの道に入り、爾来うなぎ職人として腕を磨いてきた。都内の名店を渡り歩いたすえ独立、自宅を改築し、妻のみち子さんと二人でうなぎ専門店を始めた。

圧巻なのはやはりその値段設定。一般的なうなぎ専門店のほぼ半値に近い。時には「値段、間違っていないですか」、「この値段で平気なの」といった声もあるとか。たしかにメニューのどれをとってもお値打ちなのばかり。この値段だったら量も少ないし、加工品を使っているのではと高を括ったら大間違い。供されるうなぎのボリュームにきっと目を瞠ることだろう。勿論、生きた鰻を割り、串打ちしているからこそその本格的な味わい。付け合わせとしてたっぷり盛られたお新香をつまみに、焼き上がるまでのひとときを愉しむのも乙なものだ。サイドメニューの焼き鳥もまた大振りて人気のある逸品。訪れてみる価値は十二分にある。



(写真)うなぎ重天ぶ付 1,300円 うなぎ重竹 1,000円 焼き鳥(ねぎま2本) 400円



真味百撰 70

輪廻転生は本統にあるのでしょうか。死後の世界はあるのか、あるとすればどんな風光でありましょうか。この問いに応えるのはなかなか難しい。何故ならば、私たちは「前世」を記憶していない、知られていない。せめて過去世のひと齣なりと知ればと思うが叶わない。長じて、うすうす解つてきたことだが、私たちは過去において「壯絶」な戦いに勝ちぬいてきた「勝者」であるということでありませぬ。そもそも、父の軀にありし頃、一億の命が轟いていたわけです。その後、母の軀内を経て、画然としてこの世に姿を現わした勝者なのです。この世に出るから、ピンポンに勝つたの負けの、試験に受かったの落ちたのと一喜一憂する存在ではないのです。私たちは、もともと勝者的な存在なのですか。どのように勝者なのかを噛み砕いて申しあげましょう。一億個の精子を、まず二分いたします。仮にAブロック、Bブロックと名付けておきます。

Aブロックに五千万、Bブロックに五千万が陣を張ります。さて、ここからは甲子園の高校野球選手権を思い出してください。そう、トーナメント方式でいきます。Aブロックで一回戦を勝ち抜けば、一気に二千五百万が生き残ります。このようにして二六回ほど戦うと、Aブロックの優勝者が決定するわけです。その勝者を仮りに「A君」と名付けておきましょう。Bブロックも同様にして、トーナメントが進

んでまいりますと、勝者に「B君」が選出されることとなります。二六回も勝ち抜いてきたのですから、A君B君ともに疲労困憊であるにちがいないありません。が、しかし最後の大切な一戦が待ちかまえております。A君とB君による「決勝戦」であります。この一戦は、まさに史上まれに見るお戦でありませぬ。武蔵と小次郎の巖流島などは比較にならない程のお戦であります。なにしろ、他人事ではない「自分事」ですから、疲労困憊を承知のうえでA君、B君が対峙します。どちらに勝利の女神が微笑んだかといえ、もちろんA君であります。他ならぬ「私」がA君なのです。私たちは日頃、どうでもいい些事にふりまわされておりますが、決勝戦まで勝ち抜いた「私」を偶には憶い出してみてください。それにしても、永遠のライバル、あのB君は一体、何処で何をしていますでしょうか。懐しいなあ、B君。私がいま、一番逢いたいと思っっているのは他ならぬB君であります。(やまだこうら・詩人)

ごろさんの独断毒語

39

B君

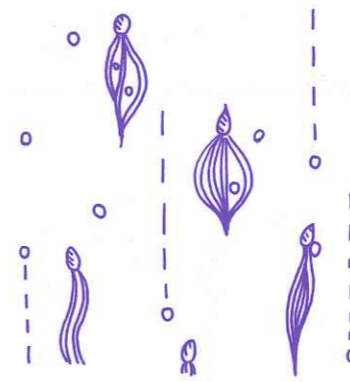


イラスト: 綾幸子

立川と多摩地域がもっと楽しいホームページ 多摩てばこネット http://www.tamatebako-net.ne.jp/ 多摩てばこネット編集工房 〒190-0012 立川市曙町3-4-3 武蔵ビル2F tel 042-548-9606 fax 042-548-9609 e-mail message@tamatebako-net.ne.jp

常楽我浄 真如苑提供番組くじょうらくがじょうよう> スカイパーフェクトTV 216ch、マイ・テレビ 84ch 土 曜 午前9時~9時15分 午後7時15分~7時30分 再放送/火曜 午前9時~9時15分 午後7時45分~8時 放送時間は予告なく変更する場合がございます。 立川に育てられて六十六年 真如苑 柴崎町1-2-13 Tel. 527-0111(代)

ふれあい、さわやか 山梨中央銀行 *立川支店* 〒190-0011 立川市高松町2-16-13 TEL 042-526-1571

デジタルえほん メモリーブックにどうぞ... ミッキーやキティちゃんと一緒に...!! あなたの写真と名前が絵本の中に入ります。 PLANNING・DESIGN・PROCESS・PRINTING 大廣社 042-527-1911 〒190-0022 東京都立川市錦町5-17-13 FAX. 527-1949 E-mail info@daikousya.jp

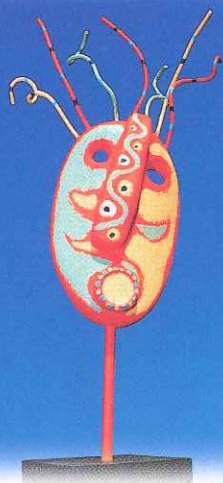
「そらへ その一」.(2000年)



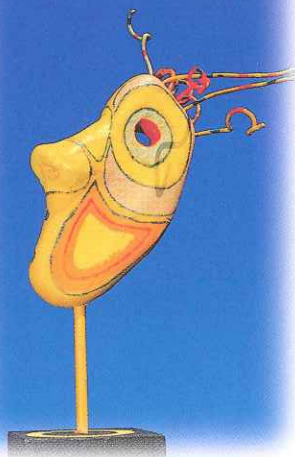
人形 気分

さとうその子の世界「最終回」

銀座のギャラリーで仮面をモチーフにしたグループ展がありました。たしか「想」というテーマを選んだと思います。時折、他人と逢いたくないときってないですか。そんな気分するとき、手に持った自分の顔を隠せる仮面、違う自分に変身できる仮面を創ってみました。これには落ち込み沈んだ心を鼓舞し、明るく振る舞えるようにとの想いを込めています。



「そらへ その二」 (2000年)



「そらへ その三」 (2000年)